

グローバル通信

2016. 3 vol.40

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN

新たな門出と新たな出会いに胸が高鳴る季節の到来です。日増しに暖かくなってまいりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。さて、今号は二大特集を組んでおります。まずは修士論文を書き終えて、執筆された方々からコメントを頂戴しました。執筆された皆さまお疲れさまでした。そして本グローバル通信との深い関わりがある大矢野先生のご退職特集でございます。大矢野先生ご本人だけでなく、政策学・法学研究科長や院生からもメッセージをいただいております。また、亀岡市でのインターンシップの報告も掲載しております。ぜひご覧くださいませ。

四月からの新生活、健康にだけはお気をつけて頑張ってください。皆さまが、良き門出をお迎えになりますようお願い申し上げます。
(編集部)

京都流 地域創生 ～『文化創生』から新たな生活を～

1

京都議定書を基盤とした活動で脱炭素を目指します

1

修士論文を書き終えて

2

大矢野先生 ご苦勞様でした

3

報告／亀岡市役所インターンシップ

4

修了生の今

4

事務局インフォメーション

4



京都流 地域創生 ～『文化創生』から新たな生活を～

山田 啓二
(京都府知事)

龍谷大学と京都府との間で、平成22年9月に地域社会における人材育成の重要性に鑑み、双方の持つ資源を活用し、地域社会が求める高度な識見を有する人材を育成することを目的に「地域人材育成に係る相互協定」を締結し、今年で6年目を迎えます。

社会情勢が急速に変化する中で、時代の変化を鋭敏に捉え、柔軟かつ新しい発想で効果的な解決策を提案していく専門性や政策形成・提案力が必要とされており、この間、本協定をもとに、大学ゼミとの協働研究や、大学院での府職員受入等を相互協力のもとにすすめてまいりました。

自治体職員と学生だけでなく、社会人経験者、NPO職員等様々な異なる立場の方が協働し、研究活動を行う場を持ち、気づきを得ることにより、複雑化、多様化する地域のニーズに応え、地域の多様な主体の枠組みを乗り越え、地域社会で活躍できる人材の育成に努めてまいりました。

龍谷大学におかれましては、京都府のみならず、40もの自治体と協定を締結されるとともに、2つの地方議会、37のNPO等活動団体とも締結され、大学の教育・研究の成果を地域社会に活用していく取組を積極的に進められており、非常に心強く感じているところです。

昨年来、地方創生のもと、様々な取組が各地で展開されております。京都府の地域創生戦略では、少子化問題や子どもの貧困対策、若者の就労支援など、京都の「人づくり文化」を確立し、産学公の力を結集して産業を発展させる「産業文化」を育成し、京都ならではの伝統・文化に恵まれた大都市と豊かな自然をもつ田園の両方の魅力を楽しむ「京都ぐらし文化」を生み出し、京都の魅力を世界に発信できる、多様性に富んだ「地域づくり文化」へと昇華させていくことを目標にしています。

これらを実現するためには、何より「人」の力が必要となります。今後とも、龍谷大学との協力・交流を一層強めるとともに、府内の大学、企業、地域とも、これまで以上に密接に連携を深め、「明日の京都」を支える人材の育成に取り組んでまいりますので、ご理解、ご協力をお願いします。

京都議定書を基盤とした 活動で脱炭素を目指します



田浦 健朗
(気候ネットワーク 事務局長)

気候ネットワークは、「京都議定書」が採択された翌年（1998）に設立されました。京都議定書を基盤として持続可能な社会・経済を構築し温暖化を防止することを目的として活動しています。活動の柱は政策提言で、国際交渉から地域までカバーし、社会変革という大きな課題に挑戦しています。設立以来、まさに暗中模索の連続でした。その中で意識して取り組んだのが、国際・国・地域のすべてのレベルで活動し、それらを連動することです。まさに、グローバルとローカルを結びつけた活動が組織の特色になると考えています。政策提言を実現し成果をあげるためには、そのための調査研究、意見交換、セミナー・シンポジウムの開催、実践活動、先進事例づくりなどにも取り組み、説得力のある提言になるよう取り組んできました。

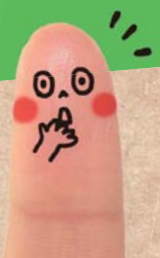
気候ネットワークは、パートナーシップとネットワークを重視しています。立場の違いを乗り越えるのは容易ではないのですが、目指すところが同じであれば、協力し連携するという考えで活動の幅をひろげてきています。これが「協働型市民社会」の構築につながるものと考えています。これまでに、京都議定書の発効という社会的な成果、地域のモデルとなる具体的な活動の成果もありました。しかし、まだまだ達成できていないことは多く、社会への影響力も極めて限定的です。

これまでの活動を通じて、「人が最も重要」だと痛感しています。取り組むべき課題が多く、常に人材は不足している状況です。様々な人・組織から支援を受けていますが、特に、大学と大学生からの協力は大きな活動力となっています。研究調査への専門的なインプットや、インターン・ボランティアによる自主的で独創的で継続的な支援は大変ありがたく思います。

2015年12月には、パリ協定が採択され、国際社会の大きな変化が起こりつつあります。世界が「脱炭素」の社会・経済に向かっていく基盤ともなりうるものです。これが実現するためには、国際関係から地域のあり方にも大きな転換が必要です。そのための国際・国・地域をまたいで政策を創出し、実施を担う多種多様な人材が求められています。地方行政研究コースとの連携を深めて、パリ協定の実施に貢献していくことができれば幸いです。

修士論文を書き終えて

一息つかれた今年度修了されるみなさんに今の感想や後輩へのアドバイスを伺いました。



2015年度 修士論文・課題研究題目一覧（政策学・法学研究科修了者）

No.	氏 名	コース	区 分	修士論文・課題研究 題目
1	木村 圭吾	NPO	修士論文	住民発意型バスの比較研究 ～京都市伏見区醍醐コミュニティバスと神戸市東灘区住吉台くるくるバスの現況の比較から～
2	辻 賢	NPO	修士論文	地域自治区による挾域の住民自治充実の可能性と課題について－新潟県上越市の事例の検証より－
3	竹村 忠憲	地域政策	修士論文	入院医療中心から地域生活中心へ ～なぜ精神障害の政策目的は実現しないのか～
4	岩松 義秀	NPO	修士論文	過疎地域を支える地域振興の組織及び連携 ～美山における地域振興システムの分析から～
5	木村 尚	NPO	修士論文	自主防災組織が地域の減災に与える影響に関する研究 ～2013年台風18号における大津市の自主防災組織活動の分析から～
6	益田 卓弥	NPO	修士論文	人口減少時代における離島集落の存続可能性の条件 －滋賀県近江八幡市「沖島」の事例を中心に－
7	村上 毅	NPO	修士論文	日本とイギリスにおける空き家対策の比較研究 イギリス「空き家管理命令」の意義と日本への示唆
8	遠藤 和美	NPO	修士論文	健康保険における「被扶養」概念の一考察 ～世帯概念に視点を置いて～
9	八尋 優子	NPO	修士論文	薬物依存症回復施設における実験的鍼灸治療 ～その理論と実践～

①お名前 ②書き終えた今の気持ち ③後輩へのアドバイス

①辻 賢（政策学研究科）

②「中身を様々な観点から追及し続けること」

様々な方向性から意見をいただきながら、論文の中身を追及し続けることが予想以上に大変でした。また最終的にもっとこうしておいたほうがよかったという後悔もありましたが、それは思考し続けたからこそでてくることだと思います。論文を書いて終わりでではなく、追及をし続ける姿勢は今後生きていくうえで大事にしていきたいと思えます。最後に様々な教えをいただいた主査の大田先生や、教員の方々、院の同期の方々へは心から感謝申し上げます。

③ 論文執筆は進歩しているのかどうかかわらず、不安になることもあると思いますが、できることを、地道に繰り返すというプロセス自体を大事にしてください。皆さんとこれから社会で活躍する同士になることを楽しみにしています。

①村上 毅（政策学研究科）

②仕事をして、講義にも出席しながら、本当に1年で修論まで書けるのか不安で一杯でしたが、なんとか修論を提出できました。空き家問題を取り扱うのは入学前から決めていましたが、研究テーマとしての問題設定（問題の所在）をなかなか明確にすることができず、苦労しました。構想は二転三転し、ある程度固まったのが中間発表のあった11月、その後も構成が上手くいかず、提出1週間前に大幅に構成を変えるなど、提出期限の直前まで格闘でした。自分なりの研究上の問題の所在をいかに早い時期に明確にできるかが、修論作成の一つの鍵になると思います。

③ある程度仕上がったら、全体を印刷してメモを取りながらチェックする。（←誤字脱字、上手くつながっていない、ここを書き加えた方が良い等、いろいろなことに気付けます。）
横40字×縦25行のフォーマットをなめるな！MS Wordでこれをきっちりやろうとすると、けっこう苦労します。私も要旨がこのフォーマットになっていなくて、提出直前に院生研究室で直しました。「指定した行数 文字数にならない Word」等のキーワードで検索すれば、参考になるサイトが見つかりますので、早い段階で確認しておいた方が良いと思います。

①木村 尚（政策学研究科）

②時間の有効活用が決め手

1月に修士論文を書き終えてほんと一息、というか正直肩の荷がおりたという感じとともに達成感にも浸っています。4月の入学当初は、30ページもの論文を本当に書き上げることができるのであろうか？仕事との両立はうまくいくのか？などなど不安がいっぱいでした。しかし、先生方の熱心な指導のもとなんとか完成することができたのです。社会人院生は、仕事との両立をうまくこなし、時間を有効活用すること。これに尽きると思います。

③社会人院生は、仕事を持っている関係から時間をうまく活用しないとあっという間に1年が過ぎます。特に、私の場合、夜間の泊り勤務をしている関係で、少しの好きな時間も思ったこと考えたことをメモやパソコンに記録していました。夏までに先行研究を調べ、使用しないかもしれない研究も自分のデータとして手元に置いていました。できるだけ早い段階から先行研究調査に取りかかり、問題点と宗卓展をぶらさないことが大切です。時間は、すぐに過ぎていきます。頑張ってください。

①岩松 義秀（政策学研究科）

②修士論文から地域振興を見て

実務の遂行にあたり研究という視点が必要だと考えて大学院を希望しましたが、あっという間に時が過ぎました。短い期間でしたが、指導教官の先生を始め多くの方から導きをいただき、どのように地域振興を進めればいいのかということが認識出来たのではないかと考えます。若い院生、NPOや地域の方々の意見や疑問、先行論文などを参考に、アカデミックにまとめることは、苦痛というよりはむしろ快楽ではなかったかと振り返ります。

退官される大矢野先生から、ホームランではなく着実にヒットを打つことが大事だと8講目で熱く語られたことが、1章1章の組み立ての際に思い浮かんで書き記し...

③論文作成では「ググる」ことが大切だと。研究したい内容を、インタビュー、文献調査、インターネットなど1つのことを調べるとそれらは無数の繋がりを持っています。ググりによるインタビューは約30人、先行論文は段ボール2箱、ネットは無数・・・仕事と家庭を持ちながら、通勤の往復4時間と昼休みを使って勉強する1年だったかと・・・

大矢野先生 ご苦労様でした



11年間、ありがとうございました

大矢野 修

本年3月末をもって退職です。龍谷大学に11年間在職したことになります。この文章を書いている2月中旬はまだ諸事に追われ実感はもう一つですが、退職の日が近づくにつれ、おそらく安堵と寂しさが入り混じった複雑な感情にとらわれることでしょう。

大学の仕事で大きなウェイトを占めていたのが本大学院でした。「グローバル通信」の編集にも深く関わってきました。あらためてバックナンバーを見ますと、年4回の定期発行は2006年10月の第3号からとなっています。1,2号は不定期でワープロ仕様の簡易なもので、3号から現在のようなカラー刷り、4ページのスタイルになっています。当時編集は教員中心で、院生は編集補助という位置づけでしたが、途中から院生中心の編集、教員は補助というかたちに変更されました。それに伴いいちだんとバラエティに富んだ紙面になってきたように思います。2013年に本大学院の『10周年記念誌』を発行しましたが、編纂には修了生の皆さんの全面的な協力がありました。修了生の多彩なネットワークはこの大学院の誇れる財産だと思います。

さて大学院「NPO・地方行政研究コース」は本年4月から新たに経営学研究科がくわり、名称も「地域公共人材総合研究プログラム」となり再出発しますが、私もまた新たな出発となります。活動拠点は東京です。月並みな表現で恐縮ですが、11年間の大学生活で多くの素晴らしい方々と出会い、充実した時を過ごせたことに、万感の思いをこめて感謝申し上げます。11年間、ありがとうございました。

大矢野先生、お世話になりました。

白石 克孝 教授 (政策学研究科長)

大矢野先生は、NPO・地方行政研究コースが文科省の戦略的大学連携支援事業に採択された事を受けて、同コースの事業を推進するミッションを負って龍谷大学に赴任されました。先生はまさに同コースを育ての親とも言えましょう。コースを総合研究プログラムに模様替えする年に定年される事は本当に感慨深いものがあります。一緒に仕事ができ、私も楽しい大学人としての年月を過ごせました。大矢野先生、お世話になりました。

飄々としたスタイルと院生指導

高橋 進 教授 (法学研究科長)

大矢野先生の特徴はその飄々としたスタイルです。法学部政治学科大学院のNPO・地方行政研究コースの開設で着任されましたが、市職員風でも研究者風でも住民運動家風でもない、そのスタイルと風貌、指導内容は最初から、そして一緒に授業をしていても、とても印象的でした。ある意味でこのコースのユニークさを体現しておられました。創設メンバーがおられなくなるのは寂しいですが、後継者たちが立派に育っています。これからもお元気で活躍下さい。

お茶目さと厳しい指摘

植村 暢子 (政策学研究科)

大矢野先生ご退職おめでとうございます。

「論文はラブレターだ」と教えてくださった先生のお茶目さや、あたたかな笑顔、時に厳しいご指摘は大学院の生活の中で、私の大切な経験の一部になりました。沢山ご迷惑をおかけしましたが、会うたびに心配してくださる先生に本当に救われました。ご退職後も様々な場所で学術や社会に貢献していられることと思いますが、先生のご活躍とご健康をお祈りしています。



8 講時の中華料理店で

中村 麻伊子 (政策学研究科修了生)

3月に大矢野先生が龍谷大学を卒業されるにあたり、政策学研究科の修了生を中心に大矢野先生が8 限目を開講下さっていたお店に集合しました。年代に関わらず、多くの修了生が集合したのは大矢野先生がいつも親身になり、また個人を尊重して様々な考えを導き、集約して下さるお人柄によるものだと確信しました。龍谷大学を離れられることは大変寂しいですが、今後益々のご活躍とご多幸をお祈りいたします。大矢野先生、お疲れ様でした。

私は昨年の8月から約半年間、亀岡市役所総務部安全安心まちづくり課のインターンシップに参加させて頂きました。この半年間、防犯や交通安全といった分野から、簡単な事務作業から現場に行く実務的な仕事まで、様々な業務に携わりました。

これから、政策学部や政策学研究科が大切にしているコミュニケーション能力や課題発見・分析能力が行政でどのように活かされているのかを生身で学ぶ事が出来ました。私自身他学部出身であった事から、



右から3人目

政策学を学ぶ面白さを改めて感じましたが、一方まだまだ課題を見つけ、分析する力が足りていない事や、理論等の知識不足に痛感する事もありました。

これらは修士論文の研究の他に、大学院終了後の進路先でも必要不可欠な能力となっていきますので、今後はより一般論での学びも現場での学びも大切にしていき、自分のステップアップにつなげていきます。

最後に、ご指導くださった先生方や職員の皆さまに心から感謝申し上げます。

修了生の今

吉川 博之 (大津市都市計画部住宅課 2015年修了)

綱渡りの日々を過ごしたことが懐かしい

昨年度、大学院を修了してから早1年になります。

在学中は仕事との両立に苦労しながら、綱渡りの毎日を過ごしたことを昨日の事のように感じています。このような場で共に学ぶ仲間と出会い、論文作成の苦難？を乗り越えながら、忙しい合間にも交流を通じ友情を深めていったことが今の私の大きな財産となっています。

私の現在の仕事は都市計画部局で、今後の住宅施策を担う新マスタープラン策定に関する業務に取り組んでいます。少子高齢化が進む社会への適応だけではなく、将来世代への負担低減の視点も今後は重要となります。現役世代、将来世代の両者にとって最良な選択肢を見つけるのは簡単ではないですが、大学院での学び経験を活かし、新しい価値を発掘していけるよう取り組んでいきたいと考えています。



事務局インフォメーション

●政策学研究科 海外フィールド研究・修士論文報告会

日 時：2016年3月12日（土）10：00～13：00
場 所：龍谷大学深草学舎和顔館B101教室

●学位授与式

日 時：2016年3月19日（土）10：30～
場 所：龍谷大学深草学舎顕真館

●入学式

日 時：2016年4月1日（金）14：30～
場 所：龍谷大学深草学舎体育館